

小学校特別支援学級における自立活動の指導に対する 教員間の共通理解の工夫・困難さの内容分析

○鉄井史人
(愛知教育大学教職大学院)
KEY WORDS: 自立活動

相羽大輔
(愛知教育大学 特別支援教育講座)
教員間の共通理解 知的障害

I. 問題と目的

自立活動は、時間における指導や各教科等の指導を通じて行うなど、学校教育全体を通して行うものであり、教員間での共通理解が重要である。それに関わらず、自立活動についての意識や指導内容の理解にばらつきがあり、共通理解が進まないという指摘(今井・生川, 2013)もある。

よりよい自立活動の指導を目指すためには、教員間での共通理解に関する困難さを低減するとともに、共通理解を円滑に進められるように工夫していく必要がある。

そこで、本研究では小学校知的障害特別支援学級担任に調査を行い、自立活動の指導に対する教員間の共通理解の工夫や困難さを質的に解明することを目的とした。

II. 方法

1. 参加者・調査手続き

本研究は、政令指定都市である X 市の小学校知的障害特別支援学級の担任を参加者 ($n=91$) として、自由記述形式の質問紙調査を個別郵送形式により実施した。参加者の教職経験年数は 1 年から 38 年で、平均年数は 12.8 年 ($SD=9.7$ 年) であった。その内、知的障害教育(特別支援学校勤務・知的障害特別支援学級担任)に携わった経験年数は、1 年から 37 年で、平均年数は 9.9 年 ($SD=9.4$ 年) であった。

調査にあたっては、調査協力校と調整を行い、調査目的、内容、倫理に関わる説明を含んだ依頼文・質問紙・返信用封筒のセットを送付し、202X 年 3 月からの 2 カ月間で返送を依頼した。なお、本研究は所属機関の研究倫理審査を経た上で実施された。

2. 調査内容

先行研究(今井・生川 2013)を参考に、自立活動を指導する際に、教員間の共通理解を図るために行っている工夫と困難さについて、具体的に尋ねた。

3. 分析方法

質問紙の回収率は 91%であり、自由記述で得られた回答は工夫が 86 件(平均 0.94 件)、困難さが 71 件(平均 0.78 件)であった。それぞれの回答を意味内容の類似性から分類・カテゴリー化し、項目とカテゴリーに整理した。この作業は、特別支援教育を専門とする大学教員 1 名、大学生 3 名、教職大学院生 1 名の合議で行った。

III. 結果と考察

分析の結果、工夫は 7 項目 3 カテゴリー(Table1)に、困難さは 9 項目 3 カテゴリー(Table2)に整理できた。特徴的な工夫・困難さが何かを検討するため、それぞれについて回答者数の多い上位 5 項目を取り出し、考察した。

1. 特徴的な工夫

(1) 今後の指導内容についての検討・確認(例:話し合いながら指導内容を決めている)、(2)定期的な教育効果の検討(例:個別の指導計画作成時や個人懇談会前などに定期的に話し合う場を設けている)、(3)指導目標の検討・確認(例:目標決めくめあて>を話し合っ

Table1 教員間の共通理解における工夫のカテゴリー・項目と回答件数・人数・人数比率

カテゴリー	項目	件数	人数	比率
よりよい指導のためのカンファレンス	今後の指導内容についての検討・確認	29	25	27.5%
	定期的な教育効果の検討	23	22	24.2%
	指導目標の検討・確認	3	3	3.3%
日々の気付きの共有	日々の気付き	22	20	22.0%
	指導の振り返り	2	2	2.2%
校内教職員との連携	理解・啓発	5	5	5.5%
	ツールの共有	2	2	2.2%

Table2 教員間の共通理解における困難さのカテゴリー・項目と回答件数・人数・人数比率

カテゴリー	項目	件数	人数	比率
機会設定の困難さ	時間の設定	14	14	15.4%
	場の設定	10	10	11.0%
	一人による困難	3	3	3.3%
	相談者がいない	3	3	3.3%
経験値の違いに基づく指導観の差	自立活動の認識の不足	10	9	9.9%
	指導観の相違	7	5	5.5%
	指導経験の不足	4	4	4.4%
ゆとりのなさ	時間的制限	17	16	17.6%
	特別支援学級教員の不足	3	2	2.2%

これまでの指導内容・教育効果についてフィードバックしたり、今後の指導内容・目標を検討したりするための場や時間を設けていることを示した内容であった。

また、(4)日々の気付き(例:その都度、気付いたことを話し合っている)は、児童の姿や指導場面での些細な気付きを共有し合う内容であった。(5)理解・啓発(例:自立活動において 0 学年に協力をしてもらっている)は、特別支援学級担任以外の校内教職員との連携を意図した内容であった。

2. 特徴的な困難さ

(1)時間的制限(例:他の会議が多く時間がとれない)、(2)時間の設定(例:定期的に時間を設けることが難しい)、(3)場の設定(例:統的な共通理解を図る場が設定できない)は、共通理解の場を設定する余裕の無さに関する内容であった。

また、(4)自立活動の認識の不足(例:「自立活動ってナニ?」という感覚なので共通理解が難しい)と、(5)指導観の相違(例:最終的な目標を決めるとき、細かな部分で感覚的にどうしても誤差を感じる)、は、自立活動に関しての知識や理解の差が生じることで共通理解が難しい内容であった。

以上、本研究では、小学校特別支援学級担任が自立活動の指導を行う際の教員間の共通理解に対する工夫と困難さが明らかにされた。共通理解を図るためには、定期的に指導について検討を行う機能と日々気づきを共有する機能を、チームカンファレンス等に取り入れる工夫が必要であると推察できる。また、校内職員との協力、連携を試みていることから特別支援教育コーディネーターとして情報を適切に発信していく工夫も重要であろう。

一方、時間や場の設定の困難さからは、ゆとりが少ない状況でも実施可能なチームカンファレンスのあり方など、共通理解の仕組みづくりが今後の課題として考えられた。

【文献】

今井善之・生川善雄 (2013) 知的障害特別支援学校における自立活動の現状と教員の課題意識. 千葉大学教育学部研究紀要, 61, 219-226.

(TETSUI Fumihito & AIBA Daisuke)